

空間の表情の差異による仮想境界

指導教員 吉松秀樹教授 印

6AEB3221 佐藤 慶太

□問題意識「Texture から感じる仮想境界」

都市の中に存在する仮想境界に着目した (Fig.1)。実際には物理的隔たりはないのだが、あたかもそこに隔たりがあるように感じる空間には、都市の中にある様々な Texture の変化によって感じ取ることができた。

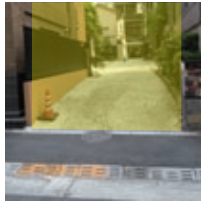


Fig.1 都市で感じる仮想境界

□調査・分析「神楽坂石畳路地のやわらかみ空間」

神楽坂の石畳の路地で感じられるやわらかみのある空間に魅力を感じた (Fig.2)。このやわらかみ空間は、石畳のいびつな歪みから感じ取れると考える (Fig.3)。鋭く直線的なエッジではなく、いびつに歪んだ曲線や凹凸により、非人工の様相を持った石畳には、物理的やわらかさではない“やわらかみ”があるように感じられる。ここで挙げている“やわらかみ”とは物理的な“やわらかさ”とは異なる。



Fig.2 やわらかみ空間



Fig.3 いびつさから感じるやわらかみ

□モデル化「紙の皺によるやわらかみ」

普通の紙をくしゃくしゃに丸め伸ばすと、多くのいびつなしわや凹凸ができる。これにより変化の前後では物理的やわらかさはほとんど変わらないが、紙全体にやわらかみが生まれる (Fig.4)。この紙の皺の一部を抽出し拡大することで、やわらかみのある壁を作り出す。さらに拡大倍率を変化させることでやわらかみに強弱をつける。凹凸や歪みからできる影の不均一さやランダムさが増すとやわらかみも増すと考える (Fig.5)。

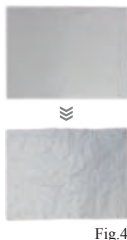


Fig.4

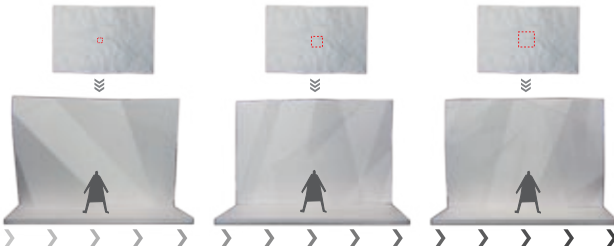


Fig.5 拡大倍率の変化とやわらかみの強弱

□プログラム「やわらかみ漂う住宅」

安らぐ場である住宅をやわらかみモデルを用い設計する。各空間に漂うやわらかみを変化させることで仮想境界を形成し、物理的隔たりを可能な限り排除した、内部空間において繋がりを持つ住宅を設計する (Fig.6)。

□建築「光の拡散反射によるやわらかみ」

拡散反射とは、光が物体表面の細かな凹凸によってランダムな反射を繰り返し、再び表面から外に向かっていく現象 (Fig.7)。これにより、実際には光の当たらない場所にも乱反射した光があたり、拡散を繰り返した光はやわらかみを持ち、空間をやわらかみで包む。

これを住宅に当てはめ、光の入る場所から奥に行くほど光はやわらかみを増し、空間にやわらかみの差異が生まれ仮想境界を形成する (Fig.8)。

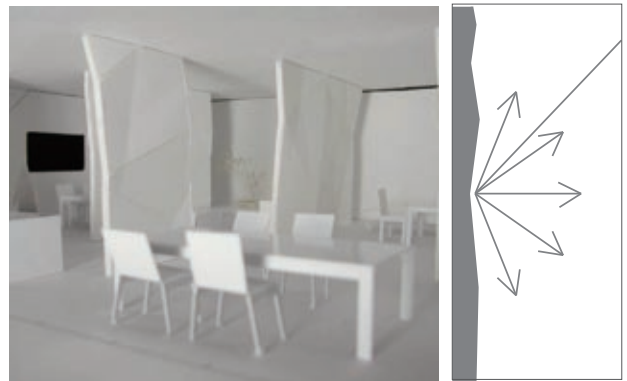


Fig.6 内部空間の繋がりに

Fig.7 拡散反射

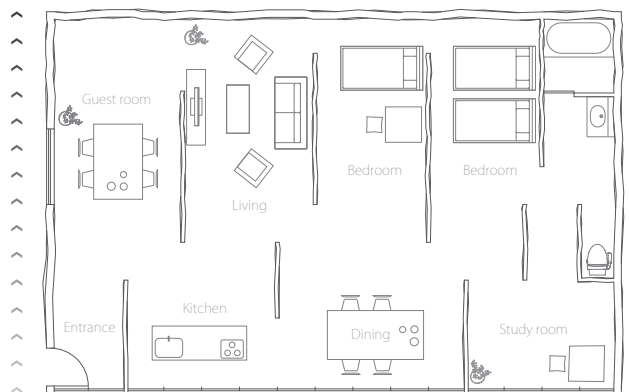


Fig.8 Plan S=1/200

□今後の展望

さらにやわらかみを細分化し、空間の仮想境界の形成に繋げていく。また、建築の平面構成・断面構成からやわらかみを作り出し、やわらかみの漂う建築を設計する。